

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

d 平成24年 6 月 1 日現在

機関番号：11401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：22820006

研究課題名（和文） 英語学習動機減退の詳細分析と実践的提案について

研究課題名（英文） Analysis of demotivation in learning English and practical its implication for classroom teaching

研究代表者

濱田 陽 (HAMADA YO)

秋田大学・教育推進総合センター・助教

研究者番号：00588832

研究成果の概要(和文)：2年間の研究を通し、最終的に英語学習動機減退防止基本方針として、以下の6点があげられた。(1)学習者中心(2)情熱を持つ(3)教師主導(4)言語自体以上の事項提供(5)個に応じた教育(6)将来的使用。(1)と(3)は一見矛盾しているように思えるが、教師が主導した上で学習者中心の授業を行うということであり、(4)(5)は学習指導要領においても強調されている点であり、指導要領に沿った指導を行う事によって、動機減退が防止できる事も示唆している。

研究成果の概要(英文)：Through the two-year study, six basic principles for preventing demotivation in learning English as follows. (1) Learner centered (2) Passion (3) Teacher centered (4) Beyond language (5) Individual oriented (6) Future use. (1) and (3) might appear to contradict, but what it means is that teachers should plan and give learner-centered lessons. (4) and (5) are emphasized in the Course of Study, and it suggests that following the Course of Study can prevent demotivation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	640,000	192,000	832,000
2011年度	290,000	87,000	377,000
年度			
年度			
年度			
総計	930,000	279,000	120,9000

研究分野：応用言語学

科研費の分科・細目：人文学・外国語教育

キーワード：動機減退、動機づけ

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 動機づけ理論についての研究は、世界中で盛んであり、帰属理論、自己効力感理論、自己価値理論、目標理論、自己決定理論など代表的な理論が提唱されている。日本でもそれらに基づき、動機モデルにおける研究は多岐に渡る。その一方、動機減退についての研究は、1990年代頃から始まり、Dörnyei (2001)の先駆的な研究を基盤として、日本でも大学生を対象とした研究から始まり、近年

高校生を対象とした研究も盛んになってきている。日本人英語学習者の動機減退の要因として、教員・学習環境・自信喪失・英語自身・教科書・学習スタイル・試験・非コミュニケーション主体の授業などが挙げられている。それらの中で主要な動機減退要因として挙げられてきたものは、教師・試験・自信喪失・文法である。

(2) 学習指導要領において、英語教育の目標として「情報や考えなどを的確に理解し伝え

るためのコミュニケーション能力とそれを図ろうとする態度」が掲げられていたが、中学高校現場での英語教育活動を通し、英語の授業に活発かつ積極的であった中学生が高校に入学し、ある一定の時間を経ると消極的になってしまう事、そして、中学生と高校生の「やる気」の度合いが歴然としていたことを痛感し、動機減退研究を開始した。動機減退理由は明らかになっていたが、どのように防ぐかという点は研究が浅く、その必要性を強く感じ、今回の着想に至った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、中学高校大学での英語学習者の動機を減退させる要因を明確化し、3校種一貫した英語教育に配慮した、英語学習動機減退に関する実践的ガイドラインを作成することである。新学習指導要領に伴い、英語教育の目的は、「コミュニケーション能力」とその態度の育成と明確化され、同時に社会的に「高大連携」の概念が浸透し、高校と大学のつながりが以前より意識されている。一方、その根幹となる学習者の動機を阻害する要因の把握と対処法を提示する事が必要であると考えられる事から、動機を減退させる理由を、深いレベルでの理解を目的として調査し、現場での指導に役立てるため、実践ガイドラインの作成を行う。

## 3. 研究の方法

(1) 大学生に対し、教室内で実際に動機減退防止を考慮した授業を一定期間行い、その効果を測定する。

(2) 1年目の基礎研究・実験をもとに、実践的ガイドライン作成のためのアンケートを作成し、比較的大きな調査を行う。

平成22年度

<目標>

実践パイロットと収集した情報と実践を基にしたガイドラインの作成の基礎作り

<遂行項目>

- ・ 文献研究/資料収集
- ・ 聞き取り調査
- ・ 授業実践パイロット

平成23年度

<目標>

平成22年度を基盤としたガイドライン作成

<遂行項目>

- ・ 文献研究
- ・ 質問紙作成・実施/分析
- ・ ガイドライン作成

## 4. 研究成果

<平成22年度>

以下3点を行った。

- (1) シャドーイングを活用した学習者のリスニング自己効力感育成
- (2) 既に動機減退している高校生へのインタビュー調査
- (3) 実際の授業における細かい動機減退・動機回復の調査

(1) においては、「シャドーイングを活用したリスニングに対する自己効力感の育成を行う事による、学習者の動機づけ及び動機減退の防止」を、実践研究として行った。Bandura (1977)の自己効力感理論に基づき、シャドーイングのトレーニングを毎回行う事によって、学習者のリスニング力が向上し、それによってリスニングに対する自己効力感が向上する、という仮説を検証した。結果は、リスニング力伸長と共に、リスニングに対する自己効力感も統計的に伸長していたため、シャドーイングが動機減退防止に役立つ可能性があることが示唆された。

(2) においては、既に動機が減退している高校2年生2名を対象に、個別インタビューを実施した。動機減退の複雑性を検証する事を目的として行い、動機の高い学習者と既に動機減退している学習者の区別が必要な事も判明した。同じ動機減退理由と考えられる要因も、動機の高い学習者とすでに動機減退を起こしている学習者では影響の受け方が違い、ゆえに動機減退要因の複雑性も異なる事が分かった。極端な例を挙げると、テストという動機減退要因は、動機の高い学習者の中には逆に動機づけの要因ともなり得るが、動機減退を起こしている学習者にとっては、さらなる動機減退の理由となる場合が多いという事である。

(3) においては、先行研究を基に、66名の大学一年生を対象に、動機減退防止を意識した英語の授業を行った後に、動機減退をテーマにフィードバックしてもらった。分析の結果、動機減退防止の裂くとして、六つのカテゴリー分類が可能であった。

1. シャドーイングによるリスニングトレーニング
2. コミュニケーションのアクティビティ
3. グループ・ペアワーク
4. 文法訳読法をあまり使わないこと
5. プレゼンテーション
6. 教員の独特さ

1. リスニング力が不足している学習者が多いのに、高校時代にリスニングのトレーニングを受けてこなかった学生が多く、フィードバックには、リスニング力の向上方法が分かった、との既述が多かった。

2. 3. コミュニケーションを焦点とした活動を、純粋に楽しんでいる学習者もあり、また、グループワークの利点としては、不安感の軽減という要因が挙げられた。グループワークを行う事で、個人では理解出来なかった点を友人に聞く事が出来、それによって「分からない」という不安が軽減されたという過程が伺える。

4. 5. 文法訳読法をあまり使用しない事は動機減退を防止する上で重要ではあるようだが、一方、それ以外の教授法も必ずしも抵抗がないというわけではない、という結果が得られた。つまり、「慣れ」ていない教授法による戸惑いが考えられるという点である。ゆえに、コミュニケーションを主体とし、文法訳読法はあまり使用しないと同時に、各活動の目的を学習者に理解させて授業を進める事が重要である。「和訳先渡し法」もお勧めである。この点はプレゼンテーションにおいても同様の事が当てはまり、プレゼンテーションを理由なしに行う、ではなく、その過程・理由を明示して学習者が納得した上で行う、という基礎的であるが重要な点を今一度確認したい。

6. 結果より、活動と活動の合間に関連した小話をする事によって、学習者が次の活動に入り易い・その活動に対する興味を喚起する・リラックスさせる、という効果があり、それにより動機減退に効果的だという示唆が行われた。

<平成23年度>

量的データ分析により、より一般化したマニュアルを作成することを目的とし、入念な質問紙作成を行い、以下のように実施した。

(1) 質問紙の作成。Dörnyei (2001)の動機づけストラテジー、それをもとにして作成された篠原(2009)の日本人向け動機づけストラテジーを基盤として、最終的に41項目の質問紙を作成した。より多角的な視野からの示唆を行うため、以下のような手順で質問紙を作成した。

1. 篠原(2009)の質問紙を、過去の関連文献を参考に、項目を削除したり増やしたりし、48項目の質問紙とする。

2. 48項目の質問紙を、既に動機の減退している3名の大学生と動機の高い3名の大学生に見せ、インタビュー形式でさらに項目の添削を行った。

3. 教育学を専門とする2名の大学教員と4名の大学生の最終チェックを経て最終的な41項目の質問紙が完成。

また、その他に、動機の高低を測定する項目、英語に対する好き嫌いを測定する項目も追加した。

(2) 国内3地域(東北・関東・東海)から構

成される、525名の大学生に質問紙調査を依頼し、分析。動機減退防止を基本方針として、(1)学習者中心(2)情熱を持つ(3)教師主導(4)言語自体以上の事項提供(5)個に応じた教育(6)将来的使用の6つが挙げられた。カテゴリーを統計的に比較すると、(3)の教師主導が最も低く、動機減退防止を目的としては、奨励出来ない方針であることが分かった。一方、各(2)の教員の情熱は最も高く、(5)の個に配慮した教育、も同様に高かった。これらより、一般の方針としては、情熱を示し、学習者中心の授業を行い、学習指導要領に指導要領に沿った指導を行う事によって、動機減退が防止できる事が示唆された。

次に、動機の高い学習者と低い学習者に分類して分析した結果、動機の高い学習者にとって、将来の英語の使い方を題材にする事は効果的と認識されているが、動機の低い学習者には同じほど効果的と認識されていないことが分かった。また、動機の高い学習者の方が、全体としてどの方針も効果的だと認識する傾向がある事が分かった。

最後に、英語の好き嫌いに基づく分析を行った結果、好き嫌いという分類では各方針に対する認識の程度に差はない事が分かった。さらに、動機の高低と英語の好き嫌いには高い相関がなく、動機減退防止を考慮した際には、英語の好き嫌いよりも動機の高低に配慮するべきであることが分かった。

研究の結論と今後の展望

2年間を通して、質的・量的の側面から、動機減退防止を念頭においた研究を行う事が出来、動機減退防止のための一般的な指導方針を示す事が出来た。さらに、程度の差はあれ、動機の高低により、重点化する方針が異なる事が分かった。

しかし、動機は「静止」している現象ではなく、日々、学習者一人一人の中でも変化するものであり、さらに同じ巨樹法でも学習者一人一人それぞれ影響が異なる。確実な方法を見いだすことは困難である。

今後の展望として、以下2点提案したい。

(1) 本研究では「教員と学習者が思う」動機減退防止の防止策を提案したが、それをもとに実際にそれらの方針がどのように学習者に影響を及ぼすのかを検証する事。

(2) また、どのタイプの学習者にはどの方針が効果的であったかという、学習者の細分化と方針の細分化を行うことによってより効果的な指導方針を提案する事。

本研究によって、高まる英語の重要性と動機減退者の数が反比例事の手助けになることを願う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

Yo Hamada, What demotivates and what prevents demotivation?秋田大学教養教育研究年報, 査読無, 13巻, 2011, 59-67

〔学会発表〕(計0件)

Yo Hamada, Psychological aspects of shadowing training, リメディアル教育研究, 査読有, 6巻, 2011, 60-71

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

濱田 陽 (HAMADA YO )

秋田大学・教育推進総合センター・助教

研究者番号: **00588832**

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号: